

クラウドファンディングで出来るコト

長井 隆

読者らは、クラウドファンディング (Crowdfunding) を知っているだろうか。これは、資金調達方法の一つである。国内だけでも年間数億円の資金調達がなされている。近年では、大企業であるソニーで活用されたり、大学などの研究資金獲得のための方法としても活用されたりしている。今回、このクラウドファンディングの活用事例を紹介する。

クラウドファンディングは、群衆 (crowd) と資金調達 (funding) を組み合わせた造語である。一般的には、不特定多数の人がインターネットなどで、他の人や組織に財源の提供や協力などを行うこととされている。その形態は、大きく五つに分かれている。一つは投資型である。これは、出資した事業の売上に応じた配当をリターンするものである。二つ目は購入型。これは、出資に対して商品やサービスなどでリターンする形態である。三つ目は寄付型。これは、特段の見返り提供を前提としない形態である。四つ目は融資 (貸付) 型。これは、利子をリターンするものである。五つ目は株式型。これは株式購入し、配当と売買益を得るものである。これらは、プロジェクトの性質によって使い分けられる場合が多い。たとえば、寄付型の場合はリターンがないので事業性の低い社会課題解決型プロジェクトに、事業性があり社会共感を得られるプロジェクトには投資型が向いているとされている。

日本では2015年、ベンチャー企業へ資金投資 (リスクマネー) の活性化のため、金融商品取引法が改正された。しかし、投資金額の制約などの理由により、投資型はまだ広まっていない。現在、日本で普及しているのは、制約を受けない購入型である。

クラウドファンディングサイトをのぞいてみると、非常にバラティに富んだプロジェクトが多い。モノを作るだけでなく、イベント開催や起業、地域活性化などさまざまである。中には、自分の携帯の修理費用をファンディングする、といったプロジェクトまである。醸造関係では、酒粕の需要拡大のために株式会社FARM8が行ったプロジェクトが興味深い。これは、新潟県醸造試験場が開発した乳酸発酵酒粕「さかすけ」を主原料としたジェラート「MUI」(現在は、「ホンノリカスカナ」

へ名称変更) の開発プロジェクトである。需要低下のために破棄される酒粕の活用、そして他の原材料を地元新潟県産とすることで地域振興にも貢献しているプロジェクトである。

近年では、研究資金調達の方法としても利用されている。近畿大学が2016年、日本の大学としては初めてクラウドファンディング運営株式会社CAMPFIREと提携し、クラウドファンディングを利用して外部研究資金を募集した。また、学術系クラウドファンディングサイトも立ち上がり、海外では「Experiment」、国内では「academist」が代表的である。特に、「Experiment」では年間100万ドル以上の研究資金を集めている。この場合の出資者へのリターンは、研究報告会への招待や、研究者とのパワーランチであることが多い。私個人としては、研究者と一般の方をつなぐ、魅力的な方法であると考えられる。しかし、ハードルもある。研究内容を一般の方に説明し、魅力的な研究であることを演出する必要がある。そして、写真や動画を用意し、Instagram、TwitterやFacebookなどのSNSを活用し、進捗報告も欠かせない活動となる。また、出資者の要望が研究者へ過度の負担となり、拙速な研究結果が出てしまう危険も考えられる。今後、プロジェクトの達成目標や実施計画などの審査体制の強化が行われると考える。

このように、クラウドファンディングは資金獲得以外の用途として活用できる。たとえば、マーケティングやプロモーションである。

新規プロジェクトがクラウドファンディングで得られる情報は多い。新規商材 (製品や企画、イベントなど) に対してお客さまがどういう価値や価格を求めているのか、どんなお客さまが求めているのか、つまり「本当の声」を知ることができる。そして、プロジェクトに投資した方は直接、開発メンバーにコメントができる。そのため、顔の見える「ものづくり・ことづくり」が可能となる。

研究や開発を行っている、より良い結果、より良い製品を求める。その良い結果や良い製品も、人に伝わって初めて価値がある。その研究や開発の「出口」をのぞいてみるためのツールの一つとして、クラウドファンディングはいかがだろうか。